

マリンバでヒロシマ発信

祖父の救護体験 胸に

神奈川の30歳奏者

中区

原爆投下後、被爆者を救護した祖父の体験をもとに曲を作った、マリンバ奏者の古徳景子さん(30)(神奈川県藤沢市)のコンサートが26日、広島市中区の日本福音ルーテル広島教会で開かれた。海外を中心に活躍する古徳さんは、「原爆を体験していないが、マリンバを通してヒロシマを発信したい」と、平和の願いを込め、演奏した。

古徳さんは幼少時、三原市にある母の実家で、祖父(2001年、81歳で死去)から原爆投下時のエピソードを聞いた。薬局を営んでいた学さんは薬を携え、壊滅した広島へ救護に向かい、数人の被爆者に薬を渡した。だが、途中

で薬が底をつき「広島まで行けずに、引き返すしかなかった」と話したという。

東京芸大卒業後、古徳さんは01年に国際コンクールで準優勝し、02年には米国立留学。米軍がイラクに進攻した時期で、古徳さんは、祖父から学んだことを伝え

ようと「学(gaku)」を作曲。曲名は、祖父の名から取った。

スウェーデン留学中には、広島市立袋町小の壁や柱に残された、被爆者らが安否を知らせる「伝言板」についての本を読み、その中に母の書き込みが残されていたという村上啓子さん(71)(茨城県牛久市)と同国で対面。伝言板をテーマにした「才願ヒ」を作詞、作曲した。

この日は、「学」や「才願ヒ」など約15曲を演奏。村上さんが、被爆証言や古徳さんとの出会いを話すと、観客席からはすすり泣く声も。古徳さんは「これからもマリンバで、平和を表現したい」と語り、村上さんも「若い世代が継承に乗り出し、広島心がつながっていると感じる」と喜んだ。

演奏を聴いた広島市の自営業中川裕二さん(59)は「原爆や平和の思いが詰まった音だった。これからの活動を広げてほしい」と話していた。

↑ 平和への願いを込めてマリンバを演奏する古徳景子さん(広島市中区で)

